

柏戸の眞実



10

祖父が入門後押し(上)

母は公務員を希望

読者ら各方面から「柏戸情報」を頂いている。「昭和39年の新潟地震(6月)の時、櫛引の小学校で児童を励ましてくれた」と星野正紘さん。郷守さんからは昔の記事資料、宮田さんからは昭和30年代の大相撲夏巡業の写真を提供された。記者も及ばない、新しい眞実。につながるような情報をお寄せください。珍しい写真は掲載したいと思います。もつじき16歳になろうとしていた昭和29(1954)年秋、高1の富樫剛少年が伊勢ノ海部屋の地元世話人を通じて大相撲入りを勧め

られた際、母かつるが大反対したことはすでに触れた。7人きょうだいの上から4番目の次男。春から鶴岡南高定時制に通い始め、1級82の立派な体を認められたものだが、本人は角界入門など全く考えたことがなかった。

剛より11歳年上の長女文子が東北営林局勤務の男性と秋田で所帯を持ち、安定的な生活をしていることを見た母の思いは「公務員はいい。剛は体は大きいが穏やかな子だし、消防や警察あたりがいいのう」に尽きた。当時「チッキ係」「赤帽」と言われた国鉄(現JR)鶴岡駅の荷物管理の仕

事にも「重い物を運ぶ時は丈夫な体を生かせるのでは」と思いをほせていた。

△コはつらいよ

それだけに体験入門後、夫・元雄が剛をそのまま置いて帰ってきたことに「東京に連れて行ったことで、伊勢ノ海部屋と地元世話人

には義理を果たせはす」と激怒した。

夫は「息子が自分からやれそうだと聞いたからだ。先輩に厳しくされたら山形に戻ってくるはず」と説明したが妻は許してくれない。元雄は婿だけに発言権が低かったのだ。娘夫婦がもめているのを



祖父蔵人と父元雄(右端)は剛の十両昇進後の帰郷(昭和33年)にうれしそう

見やり、困ったふうな表情をつくりながらも祖父・蔵人は「結構やれるのでは」と好感触があった。自らも入り婿。入門の件では妻きくも反対した。「孫が大ケガでもさせられたらどうする」と譲らない。妻と娘が強固に結びつき、富樫家の婿二代は弱い立場が続いていた。

腕の良い茅葺き職人

明治11(1878)年生まれで、当時76歳の蔵人は多芸多才だった。鶴岡市高坂・薬師神社の神主を務める家の6人きょうだいの次男。家督は長男のもので、自らは早くから手に職を求められ、屋根の茅葺き職人として腕を上げた。冬場は櫛の幹を削り、餅つきの日を作った。田んぼ2町歩は娘夫婦に任せ、自分は果物を作った。櫛引地域は昭和以前から果物作りが盛んで、それが今の「フルーツタウソクしびき」につながって

いるが、蔵人もさくらんぼ、和・洋梨、柿、りんご、ぶどうを数本ずつ。多岐にわたって作ることで、家族みんなを楽しませたいという気持ちだった。

柏鵬対比の表現

日本は第2次大戦前後の混乱期、食糧難だったが富樫家は食べ物に関しては大変な思いはしていない。加えて柏戸は赤川で鮎を引

合があった。都会で育った記者たちも疎開経験を持ち、食べ物に苦労した世代の人がいただけに、柏戸の子どもの頃をうらやましく思ったのだろう。そして大鵬とのライバル物語の対比を鮮やかにするための表現でもあった。

蔵人は孫の剛が自分にしてくれた、ある手伝いに気骨を感じ取っていた。

敬称略(富樫 嘉美)

掛け釣りのことなども少年期の思い出として話している。対して大鵬は終戦直後、樺太(サハリン)から命からがら北海道・稚内に戻ったが、引き揚げ船は次の小樽へ出発直後、ソ連潜水艦の魚雷攻撃で沈没、多くの人命が奪われた。当初一家は小樽まで乗船する予定だったが間に間一髪帰郷だった。また母の再婚後、道内の各地を転々とするなど苦労が絶えなかった。マスコミは柏戸の実家を「豪農」と大げさに書く場

◆チッキ係 手荷物の預り証を示す英語のCHICK K(チッキ)から、呼ばれるようになった。明治時代から長年、郵便小包とともに小口輸送の一翼を担ったが、昭和40年代後半、国鉄と労働組合の激しい労働争議が頻発、次第に廃れ、ヤマト運輸が昭和50年代車による宅配便サービスを開始し、徐々に役割を終えた。

毎週火曜日付に掲載